地域におけるリテラシー支援の場としての識字学級

困難を抱える若年者にとっての識字

棚田洋平

要 約　「困難を抱える」若年者が社会問題化している今日、部落においても若年層に不安定化の傾向が見られ、その支援は喫緊の課題となっている。そのような中、部落内外の「困難を抱える」若年者を識字学級で受け入れ、支援を実施している地域がある。それらの事例からは、地域に根づいたリテラシー支援の場である識字学級が、「困難を抱える」若者のセイフティネットや居場所のひとつとして、一定の役割を果たしていることが示唆された。

1　問題意識

「今の高齢の学級生が来なくなったら、うちの識字学級の歴史も終わり」。このようなことばが、2010年度に実施した「全国識字学級調査」の質問紙に設けられた自由回答欄にいくつか記されていた。識字学級の始まりは、1960年代に遡る。その頃、若年・壮年だった学級生が40年を経て「高齢化」しているのが、多くの識字学級の現状となっているようだ(1)。

しかし、全国的に見ると、今日の識字学級は、決して高齢者のみを対象にしたものではないことがわかる。**図1**は、「全国識字学級調査」で明らかになった識字学級生の年齢構成を示している。確かに、識字学級の「高齢化」は顕著であり、60歳以上の者が学級生全体の半分以上を占めている。しかし、約40%は60歳未満の学級生であり、30代までの若年者も学級生全体の23.8%を占めている。若年、壮年の学級生は、現在の識字学級にも一定数在籍しているのである。

従来の識字学級は、さまざまな事情により、学校教育を十分に受けることができなかった部落の地区住民を主な対象に、よみかき・計算能力の習得や、各種の資格取得のための学習等を、「差別との闘い」「自己解放」の一環として行ってきた(2)。近年では、地区全体の高齢化により学級生が集まらず識字学級が成り立たない地域

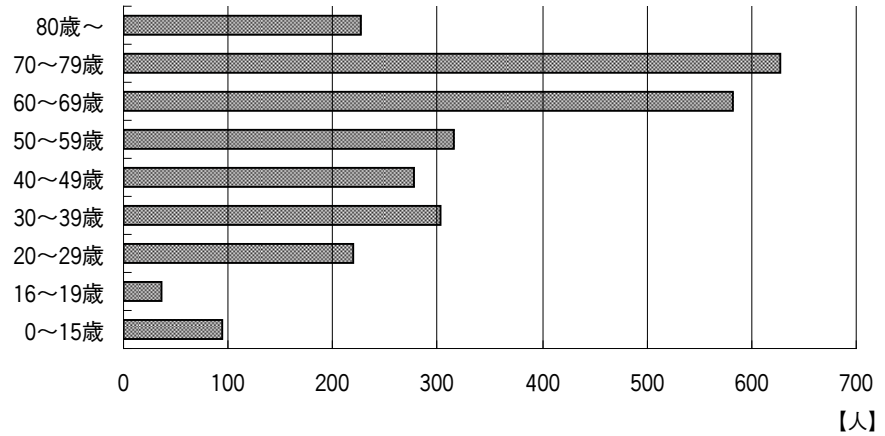

図1：識字学級学級生の年齢構成【n=2,682人】（2010年）

がある一方で、外国人住民や障害者、地区内外の「課題を抱える」若年者等、「新しい学習者」が参加するようになってきている学級もある。

本稿では、そのような「新しい学習者」を受け入れている識字学級として、豊川識字・日本語教室と日之出よみかき教室、２つの事例に着目する。いずれの学級においても、「地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律」の失効（2002年）を受けて、地区住民に限定せずにひろく学級生を受け入れるようになったという経緯があり、現在では外国人住民や地区外の「課題を抱える」人びとも識字学級に参加している。ここでは、「新しい学習者」のうち、とりわけ「困難を抱える若年者」に焦点をしぼり、識字学級における若年者支援のあり方について考察を進めていく。

2 セイフティネットとしての「識字」

1 識字へつなぐ ―高校を続かせるための識字

豊川識字・日本語教室の歴史は、1972年にまで遡る。解放会館が竣工したことをきっかけとして、解放運動の中で識字の重要性を感じていた地区の女性10名ほどが、地元の学校教員の協力も得ながら1972年４月に道祖本識字学級を開設する。当時は、識字学級とは別に、自動車免許取得を目的とした車友会や調理師免許講座などの各種学習会・講座も開催されていたという。2002年の同和対策事業の一般施策化以降、近隣地区に外国住民が多いこともあり、道祖本識字学級から「豊川識字・日本語教室」へと名称が変更され、地区内外の高齢者や障害者、外国人らが学習者として参加するようになっていった。現在、10数名の学習者が、毎週火曜日、夜の７時半から９時までの90分間、基本的に講師と１対１で、それぞれのニーズや課題にそった教材等を用いて個別に学習を進めている。各学期末には、七夕づくりや年賀状作成、地域のお祭りに出品する展示品づくり等が行われるが、それらも基本的には個別作業であり、参加者全員が一堂に会す機会は、開校式と閉校式の年２回と、隔年で実施される新年会のときのみである。

豊川識字・日本語教室（以下、識字[3]）で若者（高校生）を初めて受け入れたのは、2004年のことである。中学校３年生の頃、学校にあまり行けずにいた生徒（ミク）が、高校へ入学するもわずか３日で中退してしまったことを受けて、「識字へつなげた」ことが最初である。

ミクは、小学生の頃から勉強につまずきを感じており、中学生になっても勉強はわからない状況であった。本人いわく、小中学校時代は、「（成績は）悪すぎかな（笑）もう悪すぎて。まぁまぁ、そういうのもあると思うけど。そうそうそう、ちょっと、できなくて、みたいな」感じであったという。

＊：それはいつぐらいから勉強が、なんかわからなくなったとかありますか？

ミク：いつやろ？それわからないですね。

＊：中１の頃とかは？

ミク：うーん、中１ももうすでにわからんくて、そういう感じ。

＊：それ別に学校に行かなかったとかではない？

ミク：あぁ、ではない。

＊：行ってて聞いてても、、、、

ミク：聞いてても普通にこうやって勉強してもわからんかったかな。そうそんな感じです、かな？

＊：それ（成績）は全体的に悪かった感じですか？

ミク：全体的にもう。小学校も、中学校も。

それでも、なんとか私立高校に進学することができたものの、「なんか遠くって、『辞める』って言った(笑)なんか行くのがめんどくさくなって」という理由で、3日で退学してしまう。高校を中退した後、中学校時代に教員としてかかわっていた、青少年センター職員[4]と相談し、通信制高校にその年の9月に入り直す。しばらくは、その職員による個別の学習支援が行われていたが、「異動で自分がいなくなっても支援が続けられるように」という思いから、識字へとつなげられた。そのセンター職員も識字の講師としてかかわっていたが、ミクの講師は、他の教員（ミクの出身中学校所属）が務めていた。

識字では通信制高校で課される宿題やレポートの作成を、講師の支援を受けながら行っていた。その甲斐あって、2年半で単位を取得し、同学年の生徒と同じ時期に高校を卒業する。「私も高校のあれ（卒業資格）だけはほしかったから。働くにもそれがないと、働けへんとかあるから」と感じていたため、通信制高校を辞めようとは思わなかったという。そんなミクは識字に通っていたことを次のように振り返っている。

うん、良かったとは思う。これがなかったらたぶん、もっと何ていうか、働くのもあれやし、基礎的なこともわかってなかったから。ここ（識字学級）でほぼ全部教えてもらったみたいな感じだからかな（笑）

通信制高校の課題について「教えてもらわんと絶対できひん」と感じていたミクにとって、識字は学校における学習を補完する場として機能していたのであろう。小中学校時代に勉強につまずいたミクではあるが、「宿題提出」や「単位取得」といった目的のために、識字には通い続けていた。そのため、識字には「勉強しに来るみたいな感覚で行ってたから。宿題しに来るっていう目的があるから」、嫌々ではなく「普通に」通っていたという。彼女は、中学生のときに、青少年センターで実施されていた中学生学習会に参加していたこともあり、その「高校バージョンみたいな感じ」で違和感なく識字にも通えていたのであろう。ミクにとっては、中学生学習会への参加経験と、見知っている中学校教員の存在が、識字への参加のハードルを低くしたと言える。

20代半ばになる現在、ミクは識字には通っておらず、週5日で毎日8時間ほどアルバイトをしている。識字に通わなくなった理由としては、「高校卒業」のような差し迫った具体的な目標がないことと、毎日の仕事の多忙さが挙げられる。しかし、インタビュー時、調理師の資格取得のための通信講座の資料を取り寄せ中だと言い、インタビューに同席していた、いのち・愛・ゆめセンター（旧解放会館）館長が「識字の先生を月曜日（ミクの仕事が休みの日）の午前中とか昼からに雇って来てもろうたら」と水を向けると、かなり乗り気であった。

そうか、それいいかもしれん［中略］いいかも。教えてもらいながら。覚えたりせなあかんし。絶対、家じゃできひんもんね。（学習を途中で）やめるから。それいいかも。ちゃんと見てみよう、資料。テストもできるし。一週間のテストみたいな。なるほど。ああ、いいかもれん。ちょっと相談してみよう。

彼女にとって、識字は、地域における「学び直し」の場として、当たり前にあるものとしてとらえられており、必要があればいつでも「戻れる」場所となっているのではないだろうか。

一方で、ミクと同じような経緯で、現在、高校2年生になるチアキが識字に通っている。チ

アキは、中学校２年生の頃から「ずっと遊んで遊んで遊んでやって」という生活を送っていた。家出や軽犯罪を重ね、中学生時代に鑑別所・少年院への入所、入院を経験している。中学校の頃は「中学校がおもんないから、こんなおもんないの何でもう３年（高校）行かなあかんねん」と思っていたチアキだったが、少年院における体験を通じて「変わった」という。そして、少年院出所前に社会見学で特別養護老人ホームに行ったことをきっかけとして、「介護士なりたいなって夢できて。介護士なるためには言うたら中学校（で）勉強ろくにしてないからせなあかんやん、イヤでも。だから高校も行かなあかんのかなみたいな」という理由から、高校進学を目指す。少年院出所後は、出身中学校の教員や、いのち・愛・ゆめセンターの館長のはたらきかけによって、学校で個別の学習支援を受けたり、地域の保護者組織が主催する中学生学習会に参加したりして受験勉強に励み、１年遅れで公立高校への入学を果たす。

高校に入学して２年目となる現在、欠席することもあるが、チアキは識字に通い続けている。識字では、高校のワークやテスト前の勉強を、講師となる中学校教員[5]といっしょになって取り組んでいる。

そんな彼女は、識字における学習を「楽しい」という。

＊：ここにくるのは、どうですか？自分の中では。

チアキ：別に嫌でもない。楽しい。逆に楽しい。なんか学校で勉強してるよりここで勉強してる方が楽しい。

＊＊：なんで？

チアキ：なんでやろ。知ってる先生っていうのもあるし。一人っていうのもあるし。なんかいっぱいおったら、周りがうるさかったらいっしょになってまうし。（自分は）周りに左右されがちなところもあるから。一人で勉強するほうがありがたい。

講師が見知っている出身中学校の教員であること、１対１で自分のわからないところをていねいに学べる環境、これらの要因により、チアキにとって識字が「別に嫌でもない。楽しい。逆に楽しい」場所になっていると言えよう。現在は、介護士になるという夢を実現するために、識字に通いながら高校卒業を目指している。そのような彼女は、「中学校のチアキを知ってる人は、びっくりすると思う。学校来てる事がまず」と、過去の自分を振り返りつつ、現在の自分の姿を客観的にみつめている。

2 識字ですくう ―地域における支援ネットワーク

小学校、中学校と「勉強についていけず」、高校を中退したミク。中学生のときに非行に走り、鑑別所・少年院に入り「勉強がぬけおちていた」チアキ。ともに、端から見れば、一見「勉強嫌い」「学校教育からの離脱者」として映るだろう。しかし、彼女たちは、識字に通い続け、高校を卒業するほどのリテラシー（学力）を身につけている（身につけようとしている）。

彼女たちが「勉強」に向かったのは、まず、その必要性が感じられたからである。ミクは「仕事をするためには高校は出ておいたほうがよい」と感じ、チアキは「将来介護士になりたいので、高校は卒業しておく必要がある」と考え、その明確な目的の達成（高校卒業）を目指して、識字に通い続けている（いた）。つまり、高校卒業という手段としてではあれ、リテラシー（学力、勉強）が彼女たちにとって有意味なものとなったのである。

しかし、こうした明確な目的のみでは、不登校や非行、低学力により、絶対的なリテラシー

が不足している彼女たちが「勉強をし続ける」ことは難しい。そのことを、彼女たちを識字につなげた、いのち・愛・ゆめセンターの館長は次のように指摘する。

そやから人間関係がなかったらやっぱりしんどい。人間関係っていうか、その行ってもいいやって思えるっていうか。（識字学級は）勉強をする所やから、今までそれがしんどかったわけやから、そういう意味で敷居が高い。それやったら友だちに誘われた方がいいもんみたいな。

学校時代に「勉強がしんどかった」者にとって、識字を含めて「勉強をする所」は「敷居が高い」。その敷居を低くしたのが、彼女たちを含めて地域のことをよく知っている館長の存在であり、彼女たちの出身中学校の教員がセンター職員や識字の講師としてかかわっていたことである。豊川識字・日本語教室においては、センター職員（館長）と識字・日本語教室コーディネーターによる年度当初の学校まわりを受けて、彼女たちの出身中学校を含む周辺校の理解と協力により、学校教員が講師の半数程度を占めている。つまり、彼女たちの「事情」や「背景」を理解している教員が、講師としてかかわることが可能となっているのである。くわえて、識字では、１対１の学習形式であるため、ていねいな個別のかかわりが可能となる。こうした環境の中、小中学校時代の経験から「教師は信用できない」というチアキも、識字学級の講師（教員）との関係性は良い。

こうした関係性は、識字の場のみに限られているわけではない。識字を取り巻く当地区自体に、「困難を抱える」若者を支える雰囲気がある。

チアキ：うん。（少年院を）出てからは、いろんな人が目にかけてくれてた。出てくる前からかな、わからんけど。

＊：そういう、いろんな人って例えば、学校の先生と、他は誰？

チアキ：○○ちゃん（いのち・愛・ゆめセンター館長）、○○さん（館長をニックネームから敬称に言い直している）やろ。で、△△ちゃんおばちゃんっていう人。「△△△△（フルネーム）」っていう人。□□おばちゃんっていう人。みんな、ゆうたら、身内じゃないねんやんか、知り合いっていう程度やねん。けど、なんかやたら目かけてくれて・・・で、無事合格した。２回も停学なってもうたけど、自分なりには頑張った。

チアキが「いろんな人が目にかけてくれてた」と語っているように、当地区には「困難を抱える」若者を支える人間関係がある。これは、当地区の解放運動が培ってきたものであり、そうした関係性のもとに、かつては、解放会館や青少年会館という機能が存在し、地域におけるセイフティネットとしての機能を果たしてきた。そのうち、リテラシー支援に結びついていた活動が、識字学級や解放子ども会、中学生・高校生友の会等である。それらの活動が、リテラシー支援のネットワークとして、当地区にはあまねく存在していた。

実際、ミクは、母親が識字学級に通っていたし、自身も中学生・高校生学習会に参加していた。チアキも地域の保護者組織が主催して青少年センターで実施していた小学生・中学生学習会に参加していた。そのような彼女たちにとって、識字学級は特別な場所ではなく、当たり前に地域に存在する学びの場のひとつとなっているのではないだろうか。

現在、当地区では、青少年センターが、いの

ち・愛・ゆめセンター（旧解放会館）に統廃合されて貸館事業のみとなり、その機能はなくなったも同然である[6]。一方で、依然として、若者を含めた地区住民の厳しい生活状況は変わらない。青少年センターという「困難を抱える」子ども・若者を支援する場がなくなった今、識字は地域における唯一のリテラシー支援の場とならざるをえない[7]。

そのような中、いのち・愛・ゆめセンターの館長の思いとしては、「ニーズがあれば、もっと、識字で若い子（高校生以上）を受け入れてもかまわない」という。

もともとがターゲットとして若い子が、昔みたいに資格取るために来てくれたらというのはあるけれども、若い子をすくい上げるための一つのコースとかそんな感じではなくて、もともとの識字自身がそういうもんやと思ってるてん。自分が中学校とかで勉強しなかったり、高校とかで勉強してなくって、もういっぺんやろうというときに、資格取るでも、そんなんでも識字に来たらいいっていうのがもともとにあるねん、わたしの中にも。

かつてに比べれば、施設や機能は廃止・縮小されたものの、そうした「困難を抱える」子ども・若者の支援ネットワークが築き上げてきた文化は現在も当地区には根づいており、それが識字に若者をつなげるしくみを、実現させたと言えよう。

ただ、「困難を有する若者」を識字につなげることは、なかなか難しいことでもある。当の若者にとっては、そもそも「勉強するいうたらなかなか、目的がなければ来れない」し、たとえ識字につながったとしても「生活の中にそれが組み込まれへんかったら、１回休んだらずっと休んでしまう」ことになる。実際、前述したように、ミクは、「高校卒業」という目的を果たしてから、次第に識字から足が遠ざかるようになっていった。「高校卒業」という目標があったからこそ、識字における「学び直し」が続いていたが、その目標が達成（高校を卒業）してしまうと、なかなか参加が続かないという現実がある。館長は、こうした現実を踏まえつつ、若者が識字につながるためには、「ここ（いのち・愛・ゆめセンター）が楽しいとこやって、わかってくること。（来ることに）二の足踏まんでええような場所になることと、人間関係」が必要であることを訴えている。

豊川識字・日本語教室の事例からは、「困難を抱える」若年者をリテラシー実践につなぐためには、かれらを支援につなげる媒介者の存在が不可欠であることがわかった。さらには、「困難を抱える」若年者に相対する支援者のかかわり方も問われる。こうした人間関係のもとに、「学ぶ目的（目標設定）」があってはじめて、かれらに対するリテラシー支援が実現すると言えよう。しかし、その「学ぶ目的」が、高校卒業や資格取得に限られてしまうならば、かれらの「学び直し」は、それが実現した時点で「終わってしまう」。そういう意味では、いのち・愛・ゆめセンターの館長が言うように「ここ（識字学級）が楽しいことやって、わかってくる」「二の足踏まんでええような場所になる」しくみが必要となる。

3 居場所としての「識字」

1 識字をもとめる ―学び直しの場としての識字

前節の豊川識字・日本語教室の事例は、「困難を抱える」高校生を識字につなぎ、高校を続けさせて卒業させるという、高校中退の予防も兼ねた「学び直し」支援であった。それに対し

て、本節で取り上げる日之出よみかき教室の事例は、「学び直し」を求めて、「困難を抱える」壮年層が識字につながった例である。

日之出よみかき教室(以下、よみかき教室)は、「ムラ（部落）の女性を中心とした」識字学級として1970年５月に開設された。ここ10数年で学習者層は変化してきており、仕事や結婚などで渡日してきた日本語学習者が増えてきている。その他に、地区外から参加する学習者もじょじょに増え始めてきており、職場で困ったことがあったり、仕事がなくて困っているような3, 40代の人たちも参加するようになってきている。同時に、ここ10数年で、地域の運動団体や学校とのつながりはよわくなってきているという。

このような学習者層や地域とのつながりの変化があるものの、よみかき教室では「文集づくり」を開講以来大切にしてきた。毎年、学習者・学習パートナー[8]問わず、教室に参加するすべての人たちが「被差別体験やそれぞれの生い立ち、また日々の暮らしのなかで感じたことなどに丁寧に向き合い、書き綴る」ことによって、「自分の姿を振り返り、誇りを見いだすこと、ちからにしていくこと」が目指される。

以下は、よみかき教室のチラシに掲載されている「教室の目的」である。

> 教室では、単に文字の読み書きを学ぶだけでなく、学習者・学習パートナー問わず、いろいろな立場の人とともに学ぶことを大切にしています。そして、参加するすべての人が自分を取り戻す場所、人と人とつながる場所となるよう目指しています。なかなかうまくいかないこともたくさんありますが、参加者の「思い」が少しでも実現できる教室のあり方を学習者・学習パートナーが主体となって試行錯誤しながらつくっています。

学習者・学習パートナーが、おなじ「よみかき教室」の参加者として対等な立場で、お互いにエンパワメントできるような場づくりが目指されていることが、この「教室の目的」の文言に表れている。現在、教室活動に定期的に参加している学習者は、木曜日（夜）と土曜日（昼）とをあわせて10人程度であり、その多くは外国人住民である。それぞれの学習者は基本的に学習パートナーと１対１で学習を進めている。教室の開催場所は、大阪市立市民交流センターひがしよどがわの一室である[9]。

学習内容については、90分は個人の学習をして、残り30分は教室参加者全員で、お茶を飲みながら話をする時間となっている。以前は、共同学習の時間もあったが、日々の学習活動に追われて、なかなか実施することが難しいという。しかし、不定期に共同学習の場を設けて、部落問題学習や共同作品づくり、調理実習等を行ったりしている。個人学習については、学習者と学習パートナーとの話し合いで、その内容が決められる。教室運営は、学習者と学習パートナーで構成される「日之出よみかき教室実行委員会」によって担われており、各曜日で、全体チーフ、曜日チーフ、コーディネーター、会計、よみかきだより係、文集係といった役割がある。

このようなよみかき教室に、現在、壮年層の学習者が数名ほど在籍している。そのうちの１人である、タカフミさんは、地区外に居住・勤務している40代前半の男性である。2012年９月から日之出よみかき教室に参加するようになった彼は、各地の識字・日本語教室等を渡り歩いてきたという。

> プライベートも仕事も、元々製造業だったので書くことが全然なかったんですけど、ISO、検査関係の、あのへんで報告文書とか、前は業務日報もなかったんやけど、業務日報

書けとか。で、なんか改善するとか云々の時とかは報告書あげろとか稟議書あげろって。前までは課長とかに実物作ったらこれでとか、課長が書いて、たぶん報告してたのが、それは作成者が書くもんやっていう話になって、それでじゃあどう書くねんって課長と話してたら１時間じゃ全然無理という部分があって［後略］

当時勤めていた製造業の仕事で報告文書や業務日報等の文章作成が必要になったため、「文章を教えてもらえるところ」を探していて、それまでは「『識字』ということばは聞いたことがなかった」が、識字・日本語教室に行き着いたという。時間帯や場所、学習形式や講師との関係性といった諸々の事情から判断して、現在は、日之出よみかき教室と、もうひとつの識字学級（大阪市内）に通っているという。仕事上の文書作成のみならず、「文章を順序立てて組み立てる」ことが苦手な彼は、メールのやり取りでもなかなか相手に言いたいことが伝わらないという悩みを抱えている。また、「ひとりっ子で、部活動も特にしていなかったから」敬語がうまく使えず、上司らとトラブルになることもよくあるという。そうした「よみかき」について学習するために、彼は、よみかき教室に週２日とも通っている。

そのようなタカフミさんは、家庭の事情もあり小学校を転々とし、一時期「施設[10]にも入っていた」ということもあってか、中学生の頃から「勉強についていけなくなって」「学校（に）行く意味がなくなっていった」と語る。

タカフミさん：最初なんやろ､学校行ってて、勉強ついていけなくて。

＊：ああそうなんですか。それ何年生ぐらいですか？中１？中２？

タカフミさん：２年生中頃ぐらいだと思うんですけど。でー、ついていけなくて、それで行ってて、理解されないまんま、教室にただずっとおって。先生が一方通行でずーっとしゃべって。一応、親戚からは、理解できなくてもいいから、黒板のやつをただ書きまくれって言われて、書いたけど理解して書いてるわけじゃないからぁ。ただ、なんやろ、形だけ、なんていうか、形だけやってたっていう感じですよね。

中学校卒業後、彼は、家庭の事情もあり、「早く自立して家を出たい」という思いで定時制高校に進学する。そして、定時制高校を卒業した後、さまざまな仕事を転々とし、現在、仕事上でよみかきに困難を感じ、日之出よみかき教室に通っているのである。

しかし、高校を卒業しているため、どこの識字・日本語教室でも、「高校も出てんのに、なんで勉強すんの？」と学習者・支援者問わずに聞かれたり、「（なぜ、識字に通っているのかをタカフミさんに）聞いたらダメなのかな」というまわりの空気を感じたりするという。

やっぱりぼくみたいな異質な人でこういう識字教室、他のところでも全員に言われているんですけど［中略］ぼくがやっぱり高校も出てるのに、これは言われたんですけど、高校も出てるのに、何で勉強するのって［中略］それはやっぱり、全員（に）言われますね。どこ行っても。学習者にも言われるし、教えるボランティアの方にも。どっか一ヶ所いったら絶対一人に（は）聞かれます。その度に説明するんですけど[中略]やっぱりどこ行ってもあって。どこ行っても説明せなあかんし。聞いてもいいのか、聞いたらあかんのかなっていう目線を最初に浴びながら・・・[中略]

ぼくがおること自体が。どこの教室も基本いないですね。日本人で高校も出てるのに、来てる人がそもそもいない。

しかし、気さくで人とのつながりがすぐできるタカフミさんは、よみかき教室には参加してまだ半年であるにもかかわらず「ずっといるような」存在になっているという。また、よみかき教室への参加をとおして、識字学級関連の集会やさまざまな学習会にも参加するようになり、つい先日には集会の場で「生い立ち」作文を読むという大きな経験もした。人前で話す経験をしたことで、タカフミさんは、今後、会議でのプレゼンの練習等もしていきたいと意気込んでいる。

2 識字につどう ―地域におけるつながりの再構築

日之出よみかき教室では、識字学級の全国的状況と同じく、学習者の高齢化が進んでいる。そうした中、長期的視点で「若い世代の人が学べる場」をつくっていくことも模索していると、支援者（学習パートナー）の一人は語っている。

［前略］若い世代の人が学べる場にできひんもんやろかという模索を始めたのがこの10年くらいかなという気がします。実際、ムラ（部落）の中で若い世代・層が来るという場面は、今まで少数ながらありましたが最近ではありません［中略］ただ、ムラの人ではないねんけれども、職場とか、あるいは職場がなかなか見つからないという方で、学びの場を求めている方は学習者で少しずつ出ているかなというふうに感じます。いうても、世代的に言ったら20代とかではなくて、30代、40代。そういう人が少しずつですけども、そういう方の需要と、教室の受け入れようとしているのが、少し重なり始めているかなという気がします。それと、あともう一つは、学びたいというよりは、ボランティアとして自分が何かの役に立てるという希望を持ってはる、ただ、来られてもなかなか思いはあるけれども、誰かの、このいっしょにやろうというのが難しいという方もぼちぼち増えてきているのではないかなという感じを受けています。

タカフミさんのように、学び直しを必要とする若い世代のニーズを、日之出よみかき教室の活動は一定程度満たしている。一方で、学習者ではなく、ボランティア（学習パートナー）として「ちょっとコミュニケーションが難し」かったり、生活に課題を抱えている人たちが、「自分が何か学ぶのと役に立ちたいという思い」で、教室活動にかかわるケースもあるという。中には、「ボランティア－学習者っていう位置づけがしんどくって何もなく来る」人もいる。日之出よみかき教室は、学習者の学び直しの場であるとともに、参加するすべての人にとって居心地のよい場所ともなっているのである。

以下は、教室のチラシに掲載されている「えんぴつポスター（識字・日本語教室関連の標語作品）」の文章である。

しきじきて　みんなのかおみたら　あんしんや

なんでも話せて自分を全部出せる場　相談もできて　目的があってもなくても大切な時間がもてる　よみかき教室

年代を問わず、学習者・学習パートナーに関係なく、誰もが安心して自分を出すことができて認められる場、「いるだけ」でもよい場、そのような地域における居場所を日之出よみかき教室は目指している。しかし、そうした思いで

取り組まれているよみかき教室の活動について、地域においてはまだまだ認知されていない現状にあると、支援者の一人はいう。

> この教室が何をしてるねんって、何をしようとしてるのかが（周辺地域に）まだ伝えきれてないと思う。伝えきれてないと言うとつらい。伝えられてないところがあると思いますね。

こうした現状を踏まえて、日之出よみかき教室では、地域とのつながりをつくっていこうという動きにある。教室案内には、次のようなことばで、そのことが記されている。

> 地域とのつながりが薄れている今、教室では、少しずつでもつながっていければと地域のお祭りや支部大会、老人会の集いに参加したりしています。また、日之出地区には子どもたちの取り組みを中心としたNPOがあります。そのNPOを通じて地域の子どもたちとも少しずつでもつながっていければと思い、取り組みを応援したり、イベントにも参加したりしています。

地域におけるつながりをつくるために、具体的には、地域の祭りや集会に参加したり、地域の他団体との交流が進められている。また、最近では、近辺の他の識字学級や大阪市内の識字学級との連携もはかられている。このように、地域活動のひとつとしてよみかき教室を位置づけ、地域とのつながりの中でより多くの人がつどう場が目指されていると言えよう。

4 まとめ―困難を抱える若年者支援としての「識字」

識字学級は、1963年に福岡県京都郡に「開拓学校」が設立されたことに端を発し、その後、部落解放運動の中で「部落差別によって奪われた文字を奪い返す営み」として、全国各地で展開していった。その際、「文字のよみかき」はあくまで手段にすぎず、識字はその過程で「人間を取り戻すということ、つまり主体を破壊し疎外する差別との闘い、主体を再構築し変革する」[11]営みであり、まさに「あいうえおからの解放運動」であった。一方で、識字学級とは別に「車友会」（自動車免許取得を目指す学習会）や保育士・教師、調理師等を「目指す会」といった、各種の資格取得のための講座・学習会も各地で開催されていた。これらの活動は、当時の部落の厳しい生活実態と、それに応えるための解放運動の中で生まれ、展開されていった。

それから、数十年。部落における生活実態の厳しさは、依然として存在していることがさまざまな調査によって明らかにされている。とりわけ、若い世代に困難が収斂され、不安定化の諸相が見て取れるという実態も示されている[12]。そうした状況にもかかわらず、部落を対象とした各種施策は一般施策化、あるいは縮小・廃止される傾向にあり、本稿で取り上げた学級が存在する茨木市、大阪市では青少年施設ならびに諸事業が廃止となり、社会同和教育指導員も配置されなくなった[13]。

一方で、子どもの貧困や若者のニート・ひきこもり、若年者雇用の不安定化等が全国的に社会問題化する中、子ども・若者育成支援推進法（2010年４月１日施行）や「子ども・若者ビジョン」（2010年７月23日決定）において、「困難を有する若者」支援の必要性が若者一般の支援とは別途謳われ、教育・福祉・雇用等の関連分野における総合的推進の枠組みと、それを実現するための地域ネットワーク整備の推進の必要性が言われている。また、「困難を有する若者」支援には、その家庭をも含み込んだ包括的な支

援が不可欠とされる[14]。

こうした今日的状況において、識字学級が果たす役割とは何であろうか。全国識字学級調査の結果からは、「生活と生い立ちを交流し、人とのつながりを実感できる、生きることを励まし合える居場所」としての識字学級の役割がこんごますます必要になってくると指摘されているが[15]、こと「困難を抱える若年者」に関しては、識字学級が果たす「学び直し」の場としての機能も見逃すことができない。

豊川識字・日本語教室に通っていた（いる）ミクとチアキは識字学級において学び直し、高校卒業を果たすように促された。彼女たちは、識字につながることで、高校卒業を果たし（果たそうとし）、社会へとつながる回路を形成した（する）のである。一方で、タカフミさんは仕事上で「よみかき」に困難を抱え、学び直しの場を求めて行き着いた先が日之出よみかき教室であった。

ただし、いずれも、困難を抱える若者のリテラシー支援をする場が他に存在しないために、「しかたなくつなげた」（豊川識字・日本語教室）、「たまたま行き着いた」（日之出よみかき教室）ケースであるとも言える。ミクとチアキは青少年センターにおける高校生学習会が存続していれば、そちらにつながっていたかもしれないし、タカフミさんは他の識字・日本語教室の「学び直し」支援が十分であれば日之出よみかき教室にたどり着くことはなかったであろう。

また、リテラシー支援として見た場合、識字学級が果たす役割は限られている。識字学級における支援は、週１回１～２時間程度、ボランティアの支援者による、「学習者のニーズに合わせた」個別学習が主である。このことは、継続性や専門性、系統性という点でいうと、学び直しのプログラムとしては不十分であると言わざるをえない。しかし、実質としてボランティアベースに近い活動にそこまでの支援を求めることは、ないものねだりにすぎない。

他方で、識字学級を含めた地域における支援ネットワークのしくみ（豊川識字・日本語教室）や居場所としての識字学級の役割（日之出よみかき教室）、あるいは識字学級にかかわってきた人々の「思い」は、それぞれの地域で培われてきた貴重な社会資源である。カネ（予算）やハコモノ（青少年会館、解放会館等）、ヒト（社会同和教育指導主事、社会教育主事等の識字学級にかかわる行政職員）の廃止・縮小、削減は、すなわちそれら社会資源の喪失を意味しない。それらの社会資源を、困難を抱える若年者支援における「総合的推進の枠組み」づくりや「地域ネットワーク整備の推進」に生かすことは十分に考えられる。そういう意味では、地域における学び直しの場のひとつとして、困難を抱える若年者支援に資する役割を、識字学級は持っていると言えよう。

注

⑴全国識字学級実態調査実施委員会（2011）『「2010年度・全国識字学級実態調査」報告書』、棚田洋平（2011）「日本の識字学級の現状と課題 『2010年度・全国識字学級実態調査』の結果から」『部落解放研究』No.192、2-15頁。

⑵元木健・内山一雄（1989）『識字運動とは』部落解放研究所。

⑶当地区の住民は、豊川識字・日本語教室を「識字」と略して呼称することが多い。それに倣って、本稿でも、以下その略称を用いる。

⑷かつて、茨木市内の各青少年センターには学校教員の職員枠があり、教員人事の一環でセンター職員への異動があった。基本的に、校区の小・中学校の教

員がセンター職員に配属となっていた。

⑸チアキの講師は、出身中学校の教員３名が持ち回りで担当している。そのうち、２名はチアキが中学校在籍時からかかわっていた教員である。

⑹大阪府の「財政再建プログラム」により、2009年度より各青少年会館に事業補助費として出されていた「地域青少年社会総合事業」が廃止となり、茨木市は、市内にある３つの青少年センターの事業を、いのち・愛・ゆめセンターに統廃合した。詳細は、池田一男（2009）「大阪府内の青少年会館をめぐる厳しい情勢」『ヒューマンライツ』No.255、49-53頁、『解放子ども会改革の検証のために－子ども会の歴史と現状－』（部落解放・人権研究報告書　No.21、2012年）などを参照。

⑺当地区では、青少年センターの実質的な「廃止」後、「困難を抱える」子ども（小・中学生）の支援は、学校教育へとその比重が移され、放課後事業や放課後学習会として展開されている。しかし、学校を主体とするそれらの事業は校区全体が対象とならざるをえず、困難を抱える子どもを焦点化した取り組みはなかなか難しくなっている。

⑻日之出よみかき教室では、支援者を「学習パートナー」と称している。このように、識字学級の支援者の呼称は、それぞれの学級の歴史的背景や理念によって異なっている。

⑼大阪市内では、「市政改革プラン」のもと、各地域における人権文化センター、青少年会館、地域老人福祉センター（全32施設）が統廃合され、2010年４月より市民交流センター（10施設）が開設され、指定管理者制度による管理運営が行われるようになった。その後、2012年には同プランで市民交流センターの全廃が打ち出された。大阪市は「各地域の施設を統合して平成22年４月に市民交流センターを開設した経過を踏まえ、当面２年間は暫定措置として貸室機能を一部確保しながら公募により賃貸・無償貸付。その後は耐震性のない５館は売却、耐震性のある５館は売却・賃貸等を検討していく」としている。

参照：大阪市HP　http://www.city.osaka.lg.jp/shisei_top/category/887-0-0-0-0.html

⑽小学校４年生と６年生のときに、母親が入院し、父親が「放任主義」であったため、「施設」に一時的（それぞれ半年程度）に預けられていたという。

⑾内山一雄（1989）「日本の識字運動」元木健・内山一雄『識字運動とは』部落解放研究所、38頁。

⑿部落解放・人権研究所編（2005）『排除される若者たち－フリーターと不平等の再生産』解放出版社、内田龍史（2010）「大阪における部落の変化と女性若年層　大阪府連女性部調査から」『部落解放研究』No.189、12-18頁、妻木進吾（2010）「不安定化する都市部落の若年層　2009年住吉地域労働実態調査から」『部落解放研究』No.189、2-11頁、福原宏幸ほか（2012）「特集　部落における青年の雇用と生活（上）」『部落解放研究』No.196、2-56頁、妻木進吾ほか（2013）「特集　部落における青年の雇用と生活（下）」『部落解放研究』No.198、53-104頁　など。

⒀高田一宏（2012）「解放子ども会改革検証のために」『部落解放研究』No.196、57-67頁。

⒁伊藤良高・永野典詞・大津尚志・中谷彪編（2012）『子ども・若者政策のフロンティア』晃洋書房。

⒂菅原智恵美・森実（2012）「部落の識字学級を『居場所』として捉え直す　2011年度全国識字学級聞き取り調査から浮かぶ現状と『しきじ』の課題」『部落解放研究』No.196、68-80頁。同様のことは、大阪府内の識字・日本語教室を対象にした調査の結果からも示されている（古川正志（2010）「生活の支え、居場所として識字・日本語教室調査から見えてきたもの」『部落解放』629号、12-18頁）。